

## 甲尾同盟の成立・崩壊と岩村遠山氏

——元龜三年の武田軍遠江・三河・美濃侵攻作戦を中心に——

田 澤 大 樹

はじめに

元龜年間（一五七〇―一五七三）における武田信玄による遠江・三河・美濃侵攻についての研究は、上洛を最終目的とした軍事行動なのか、徳川氏を標的とした局地戦であるのかをめぐって、研究・議論が重ねられている。ここでは、元龜二年（一五七一）二月に始まったとされる武田信玄の遠江・三河侵攻が久しく前提となっていた。しかし鴨川達夫氏の研究により、議論は新たな段階に至った（鴨川二〇〇七年、柴二〇〇七、柴辻二〇〇九年、本多二〇一三など）。

鴨川氏は、元龜二年二月から五月の間に発給されたと考え

られてきた遠江・三河侵攻に関する諸文書の年代比定は誤りで、同年における高天神城や三河足助城への攻勢はなかったと考察した。また、元龜三年（一五七二）九月から開始された遠江・三河・美濃侵攻は本願寺など反信長勢の一翼としての働きであり、戦略上の本隊は信玄ら三河侵攻軍ではなく、秋山虎繁の東濃侵攻軍であるとした。また信玄の侵攻ルートについても、青崩峠からの遠江侵攻ではなく、駿河口からであったとした（鴨川二〇〇七）。

柴裕之氏はこれに概ね賛同し、鴨川氏の説を支持した。しかし、東濃侵攻に関しては鴨川氏とは異なり、岩村城の自発的開城を受けての対応であり、一連の作戦において美濃侵攻軍は本隊ではなかったと考察している。また、奥三河国衆の

帰属は元龜三年であること、信長包囲網は元龜三年十月時点では形成されていなかったことなど、さらに新たな見解を打ちだした（柴二〇〇七）。元龜二年の段階で三河侵攻はなかったとする両氏の見解に賛同する動きもみられた（小笠原二〇一一）。

しかし、一方で柴辻俊六氏は、これに反論し、従来説に近い見解を示した。元龜二年の遠江・三河侵攻は徳川方の記録などにもあるとして、同年の遠江・三河侵攻はあった可能性を示唆した。信玄の侵攻ルートに関しては意見保留した上で、奥三河国衆の帰属は元龜二年であること、また信長包囲網は元龜三年十月時点ですでに形成されていたとして、柴説を批判した。また岩村城の自発的開城に関しても疑問が残るとし、従来の武田氏上洛説を維持した（柴辻二〇〇九）。この後も、双方から反論が続いたが、双方の主張の隔たりはそのままである（柴二〇一〇）。

このような論争に関わって注目すべきは、武田氏と国衆との関係である。近年、国衆の研究が進展し、国衆の実態が明らかになりつつあり、大名領国の最前線に存立する国衆の独立性が指摘されている（平山・丸島二〇〇八）。また、戦国

大名領国が国家として成り立っているのと同じように、国衆領国も地域的権力として存在しており、基本的に領国として同質のものであるとみられ、単に大名権力に覆われる対象として扱うべきではない（矢田一九九八）。柴氏はこのような独立性の強い国衆を従属させることこそが武田氏の元龜三年における遠江・三河侵攻の目的であつたと考察している（柴二〇一〇）。元龜年間に限らず、武田氏の軍事行動の基調が国衆の服属させることにあつたなど、国衆の動きが戦国大名武田氏の折々の政治状況判断に大きく関わることが、これまでの武田氏研究で明らかにされつつある。本稿が考察する岩村遠山氏は、甲尾同盟の介在者としての役割を果たしており、国衆として大名間の同盟に深く関わっていた（小笠原二〇一六）。

本稿は、元龜二年の遠江・三河侵攻の有無に対する筆者の立場を示すとともに、元龜三年、同四年の武田氏の軍事行動について、武田氏に帰属した岩村城が自発的開城であつたか否かについての考察を軸に据えて検討するものである。

## 第一章 甲尾同盟の成立過程

織田氏と美濃遠山氏が関係をもったのは、天文九年（一五四〇）の織田氏による安城攻撃以降だとされる（横山二〇一七）。『甲陽軍鑑』（以下、『軍鑑』と省略）には、織田氏は美濃遠山氏の分家の一つである苗木遠山氏に信秀息女を嫁がせており、これは信秀存命中に行われたと記載されている（『軍鑑』）。織田・美濃遠山の関係は天文九年から信秀が没する天文二十一年（一五五二）の間に構築されたものだと考えられる。また、織田氏は信貞（信秀父）息女を嫁がせることで岩村遠山氏とも姻戚関係をもっているが（横山二〇一七）、『軍鑑』にその記載はなく、姻戚関係自体は史実としても、興入れの時期などは不明である。この姻戚関係は、織田・美濃遠山氏がともに領地を接していた斎藤氏に対抗するために構築されたと考えられる。

東海地方で織田対斎藤の構図が形成されていく中で、関東では北条氏・今川氏・武田氏の間に新たな関係が形成されていく。今川氏と北条氏の関係は元々良好であり、ともに武田

氏と敵対していた。しかし、天文五年（一五三六）に今川氏輝らが没したため起こった花蔵の乱以降、この関係は変化する。花蔵の乱において勝利した梅岳承芳（今川義元）は、天文六年（一五三七）に武田信虎娘を正室に迎え、武田氏と甲駿同盟を締結し、武田氏と和睦した。北条氏は甲駿同盟を不服とし、今川氏と敵対し、天文十四年（一五四五）まで断続的に続く、「河東一乱」と呼ばれる戦争を行うことになる。しかし、天文十年（一五四二）に武田晴信（以降は信玄に統一して表記）がクーデターにより家督を継承した。クーデターにより甲斐を追われた信虎は、駿府にて隠居することになった。今川氏はクーデター後に太原雪斎を甲府に送り、信虎隠居についての協議を行っており、甲駿同盟は維持された（山梨県史二二一六）。信玄は信虎を追放したものの、対外方針を変えず、信濃への侵攻を続けている。信玄は西進を行う一方で、天文十四年には改めて甲駿同盟を締結し、第二次河東一乱の調停を行い、後顧の憂いを断つために動いている。天文二十二年（一五五三）に甲駿同盟締結を進め、北条氏・今川氏・武田氏は、二者間相互に敵対と和睦を繰り返す状況を一端収束させた。

後顧の憂いを断つた武田氏は天文二十三年（一五五四）に木曾氏などの信濃国衆を服属させた。信濃国衆の中には村上氏のように上杉氏に救援を求めた国衆もいた。救援に応じた上杉氏は武田氏と対立していくことになる。また武田氏に服属した信濃国衆の中には美濃に所領を持つ者もあり、国衆の権益を守るために武田氏は美濃を視野の内としなければならなかった（小川二〇二三）。

【史料一】天文二十三年極月廿日付 武田晴信判物写（戦国遺文武田氏編 四二四号）

知久平之内、如濃州上村之郷、所務相渡候、若有不足之儀者、重而可加下知者也、恐々謹言、

天文廿三年極月廿日 晴信

下条兵庫助殿

信濃伊那郡吉岡城を居城としていた下条氏に対し、美濃にある所領を武田氏が安堵していたことが確認できる。これにより天文二十三年の時点で、武田氏は美濃の一部まで勢力をのばしていたことが分かる。ここに書かれている上村とは現在の岐阜県恵那郡南部に存在していた。

天文二十三年時に恵那郡を含む東濃を支配していた美濃遠

山氏は、前述したように天文二十一年以前に織田氏と同盟関係を成していたと考えられるが、弘治二年（一五五六）正月に岩村遠山氏の菩提寺である大円寺（恵那郡）に武田氏の禁制が掲げられたとされる（横山二〇一七）。武田氏が天文二十三年に信濃伊那郡に進出した後に、東濃岩村方面においても軍事的緊張と武田氏の影響力が高まった可能性がある。これに対し、織田氏が婚姻関係を結ぶ美濃遠山氏支援に動いた記録は見られない。これには当時の織田氏・斎藤氏・今川氏・武田氏の関係が大きく関わっていると考えられる。

まず織田・斎藤関係について述べる。織田・斎藤関係は天文二十三年から弘治二年の間にめまぐるしく変化していく。

もともと、信秀が弾正忠家当主であった時代の大半は、斎藤氏とは敵対関係にあったが、天文十八年（一五四九）に信長と道三娘の婚姻により同盟関係となる。この時に織田氏の美濃遠山氏との関係が変化したかどうかは定かではない。しかし婚姻の破棄などもみられないことから同盟関係から敵対関係に変化するということはなかったと考えられる。天文二十三年三月に斎藤氏の家督が道三から義龍へと移ったことによつて濃尾同盟は破綻へと向かう。弘治一年には義龍が長良川合

戦で道三を殺害したことにより信長と義龍は明確に対立した。義龍は長良川合戦後、信長弟の織田信成や岩倉織田氏など尾張国内の反信長派と通じた。

次に、織田・今川関係について述べたい。織田・斎藤関係が破綻へと向かう中で、今川氏との関係も変化していた。天文十九年（一五四九）に今川氏は織田方であった水野氏の刈谷を奪取しており（新行一九九四）、敵対関係にあった。しかし、天文二十年（一五五〇）七月までに將軍足利義輝（義藤）などを仲介として停戦が成立していた（戦今一〇五一）。しかし信長は信秀が没した翌月には停戦を破り、停戦の仲介を担った鳴海山口氏を攻撃した。その後信長は、道三の軍事的な支援もあり、領国内の反信長派と今川氏に対し一時的に優位に立つも、義龍の家督継承とともに斎藤氏の助力を失ったことで、信長の勢いは衰える。信長の優勢を受けて激化していた奥三河の国衆らによる反今川派の動きも収束していく。しかし、三河では反今川の風潮は根強く残った。弘治三年（一五五七）に織田氏と今川氏の間で会見が行われ、和平が成立した。この後永禄二年（一五五九）まで両氏の間に戦闘は見られない（小川二〇二三）。これは奥三河の安定を指

した今川氏と尾張領国の平定を目指した織田氏の利害が一致したためと考えられる。しかし、永禄二年の尾張国大高での衝突を機に和平は破綻し、翌年の桶狭間の戦いにつながる。

織田・武田関係について見ていく。弘治二年に武田氏が岩村遠山氏を配下に収めたとするなら、信長はこれにどう反応したのであるうか。三河境に今川氏との軍事的緊張を抱え、美濃斎藤氏とも敵対し、国内にそれに支援された反信長派が存在するという、内憂外患を抱えた状況下において、信長は、武田氏との緊張を高める行動は避けたかったであろう。

織田氏と敵対した今川氏と武田氏との関係は信虎の時代から大きく変化することなく、同盟関係にあり、どちらも西進を積極的に行っていた。永禄三年（一五六〇）に今川義元が桶狭間で戦死した当時も甲駿同盟を維持するように動いていた。一方で武田氏は、永禄元年（一五五八）頃から織田氏と通信をおこなっている。

【史料二】十一月廿三日付 織田信長書状（愛知県史二二三

〇）

先度者陣中江御使本望候、仍雖不思召寄事候、大鷹所望候、誰々就所持者御調法候而、可被懸御意候、猶埴原新

右衛門尉可申候、恐々謹言、

十一月廿三日

信長（花押）

秋山善右衛門尉殿

御宿所

これを奥野高広氏は花押の形状から永禄元年のものとは定し、岩倉城攻撃時に発給されたものだと考えている（奥野二〇〇七）。横山氏は、奥野氏の考察を受けて、武田氏側からの「陣中」への使いは、信長の岩倉攻略を祝ったものだとしている（横山二〇一四）。この通信は、信長と武田家臣で伊那地域の支配を担当していた秋山善右衛門尉（虎繁）との間で行われている。武田氏と織田氏の通信は、永禄元年時においては、織田・今川関係が和睦状況にあったことを考えると、今川・武田の同盟関係を阻害するものではなかった（小川二〇一三）。永禄三年（一五六〇）以降、織田・今川は敵対関係となっていく一方、永禄八年（一五六五）に武田氏と織田氏の関係はより深まっていく。この年、苗木遠山氏の遠山直廉と信長妹との間にうまれていた娘を、信長が養父として武田勝頼に與入れさせている（『軍艦』）。これを、甲尾同盟の成立と捉えることができる。当時の武田氏の事情をみると、

武田義信が「義信事件」により後継者としての地位をすでに失っており、勝頼が諏訪氏から迎えられ新たな後継者となっていた。

甲尾同盟という織田・武田の友好関係は、天文年間における武田・今川の西進によって発生した斎藤氏を交えた複雑な関係、そして東美濃という緩衝地があったために成立したものだ。

## 第二章 武田氏の元龜年間遠江・三河侵攻

### 論争を検証する

織田・武田氏の友好関係は、永禄十年（一五六七）頃まで問題なく継続する。永禄十年に信長は稲葉山城を制し、美濃の領国化を進めていった。この時点では織田・武田氏の間には緊張関係はなかったが、翌年の武田氏の駿河侵攻を契機に変化していく。武田氏は「義信事件」以後、今川氏との関係が険悪化していたが、武田氏の駿河侵攻は武田・今川関係の破綻を決定的にした。武田氏は、そのため今川氏と良好な関係にあった北条氏とも敵対した。武田氏の駿河侵攻は徳川氏と

の連携のもと行われた。

『軍鑑』によれば武田・徳川両氏は永禄十一年（一五七八）二月に今川領国の国分けを行い、武田氏は十二月に駿河に侵攻した。北条氏に対しては「今川氏真が、上杉氏と組んで武田氏を滅ぼそうとした」と駿河侵攻を正当化した。北条氏との敵対を避けようとした武田氏だが、それは叶わず断交された。さらに、北条氏は上杉氏と越相同盟締結の交渉を開始した（上越六二八）。翌年に越相同盟が成立し、武田氏は今川・上杉・北条氏に囲まれ、そのすべてと敵対することになった。駿府へ侵攻した信玄本隊とは別に秋山虎繁の軍が遠江へ侵攻した。家康は遠江への侵攻に抗議を行ったようで、信玄は秋山を撤兵させた（静岡県史資料編7三五五九、三五六〇）。また、信玄は信長に対し家康の疑心を取り除くために駿府に留まることを伝え、弁解のための使者を送っている（戦武一三五一）。また、越甲和与のために信長の働きに期待をかけている（戦武一三七六）。

武田氏の今川領国への侵攻によって、北条氏は明確に武田氏に敵対した。北条氏は上杉氏と越相同盟を結び、武田氏の動きを抑えようとした。武田氏は孤立しないために織田・徳

川氏との関係を継続させるように行動した。加えて、上杉氏との和議を結ぶために信長に働きかけ、北条氏との敵対を対外戦略の中心に据えてゆく。

しかし、徳川氏は同年五月に北条氏と単独で和議を行い、懸川城を開城させ、今川氏真を助命した（戦北二二九、一二四〇）。信玄は、これを信長側近の武井夕庵宛の書状において非難し、また徳川氏が対北条の色を鮮明にするように、信長より催促するのが重要であると伝えている（戦武一四一〇）。元亀元年に徳川氏は上杉氏と同盟を結んだ。

このような北条・徳川・上杉を全て敵にするに至った武田氏の状況は、元亀二年十二月の甲相同盟の復活まで続いた。定説とされていた元亀二年四月に始まる武田氏の遠江・三河侵攻が実際にあったとするならば、武田氏の身として、以上の敵に加え織田氏をも敵に回してしまう可能性が容易に想像されたはずで、そのような状況を武田氏が自ら好んで引き起こしたとは考えにくい。この点は鴨川氏が、信玄による元亀二年の遠江・三河侵攻説を否定する根拠の一つとなっている（鴨川二〇〇七）。

武田氏による元亀二年の遠江・三河侵攻の論拠とされてき



た史料として三河の足助攻めに関する一連の文書（戦武一七〇一～一七〇四）がある。鴨川氏は、四月二十八日付（戦武一七〇二）と四月晦日付（戦武一七〇二）の武田勝頼書状につき、これらの文書の文面に信玄の姿は見えず、勝頼が自分の行動を報じたものであるとしか受け取れないこと、また、長篠への侵攻を示していることを理由として、天正三年（一五七五）に発給された可能性が高いとしている（鴨川二〇〇七）。柴氏は、戦武一七〇一、一七〇二に関する鴨川氏の年代比定に同意し、四月二十八日付（戦武一七〇二）の文中にある「織田上洛之上、大坂へ取懸候由之条」という政治状況が天正二年以降である点を年代比定の傍証とし、山県昌景書状写（戦武一七〇四）についても、元龜四年と比定した（柴二〇〇七）。対して柴辻氏は、これらの史料を「元龜二年とするには少し無理がある」としつつ、天正二年に発給された可能性が高いとしている。両者に天正二年か三年かの違いはあるものの、いずれも信玄死後に発給されたものだとしており、武田氏の足助攻めに関する一連の文書を以て、元龜二年の武田氏による遠江・三河侵攻の根拠とすることはできない<sup>②</sup>。

次の史料は、武田氏が遠江・三河への出兵、そして信長に

挙兵した足利義昭の行動について言及したものである。

【史料三】五月十七日付 信玄書状（戦武一七二〇）<sup>③</sup>

珍札披見快然候、如來意、今度到達三発向、過半属本意候、可御心安候、抑公方様被対信長御遺恨重畳故、為御追伐、被立御色之由候条、此時無二可被励忠功事肝要候、以公儀御威光信玄も令上洛者、異于他可申談候、仍寒野川弓三張到来、珍重候、委曲附与彼口上候之間、不能具候、恐々謹言、

五月一七日

信玄（花押）

岡周防守殿

これは大和の松永久秀家臣の岡周防守に発給された書状である。ここには、武田氏の遠江・三河での戦況と、義昭が信長討伐の態度を明確にしたことが書かれている。従来、元龜二年に発給されたものと考えられていたが、鴨川氏は、「遠三発向、過半本意に属す」状況を、元龜四年（一五七三）と解釈した（鴨川二〇〇七）。柴氏も、足利義昭の信長への敵対が確認できるのは元龜四年二月以降であることなどを理由に、元龜四年と年代比定した（柴二〇〇七）。信玄は元龜四年四月十二日に没しているので、生前に花押のみ署された料



紙が死後に用いられたことになる。これに対し柴辻氏は、この文書は元龜二年のままでよいとしている。その理由として、信玄没後に出された信玄発給文書としては印判状（印文「晴信」）が知られるが、花押が署された文書となれば異質であるとする（柴辻二〇〇九）。確かに異質ではあるが、同様の、花押を署した信玄死後の信玄発給文書は作成されたにも関わらず、後代において単純に偽文書とみなされて、散逸した可能性も考慮に値しよう。また、義昭が明確に対立したのが元龜四年二月以降という点に關しての反論がされていないため、氏による元龜二年比定は根拠薄弱とせざるを得ない。氏の主張にもかかわらず、この文書もやはり元龜二年の遠江・三河侵攻説の根拠たりえない。

次の史料は、足利義昭の命により、信玄が信長・本願寺間の和睦仲介を行っていたことを示す史料の一つである。

【史料四】九月二六日付 武田信玄書状写（戦武一七四一号）  
御札之趣得其趣候、

一、信州御料所之儀、近年念劇故、不奉運上候、失面目則一所可奉献之候、

一、本願寺・信長和融中媒之儀、被 仰出候、任御下知

大坂江遣使者候、

一、上杉輝虎可被和与之旨、頻被 仰出候、愚存之旨趣、

雇両口上候間、不能紙面候、恐々謹言

九月廿六日 信玄（花押影）

一色式部少輔殿

信玄から足利義昭家臣の一色藤長に宛てて発給されたものである。第二条に記すところを文字通りとすれば、信玄が織田・本願寺間の和睦仲介を行える状況にあったことになり、この史料の発給時の時点では信玄は信長とあからさまな敵対関係とまでは至っていなかったことを示している。柴氏は、この和睦仲介活動を媒介として、以後武田氏と本願寺の同盟関係が構築されるに至つたとしている。柴氏は、この文書を元龜三年と比定し、同年十月の遠江・三河侵攻の直前とする（柴二〇〇七）。柴辻氏は柴氏の説を根拠薄弱とし、第三条に「上杉輝虎可被和与之旨」とある点から元龜二年と比定した（柴辻二〇〇九）。元龜三年一月に信玄は西上野に出陣して利根川で上杉輝虎と対陣しており、同年の九月時点では、上杉との和与は現実問題たりえないという認識であろうか。しかし、武田・上杉の間が元龜三年段階で明確に敵対関係であつ

たとしても、足利義昭が信玄に対し「上杉輝虎と和与せらるべし」と伝えることはありうることであり、これに対し信玄が「愚存の旨趣」は「紙面能わず」と応じているのは、信玄として義昭の仰せに対して現実には困難との認識を滲ませたものと読み取れ、むしろ元龜三年時点に対応している。

柴説に従い【史料四】を元龜三年九月時点の文書とすると、第二条において信玄が、大阪に使者を派遣した目的を「本願寺・信長和融中媒」と記しているのは、表向きを繕ったものにすぎず、遣使は、むしろ信長との決別の意志を固めた上で、本願寺と接触せんとする動機に発したものであったとみるべきであろう。

次の史料は、信玄が足利義昭に対する忠節を約した起請文を提出していることを示す御内書である。

【史料五】五月十三日付 足利義昭御内書（戦武四〇四九号）  
 对当家可抽忠節由、翻法印言上、慥被聞召訖、寔無二覚悟、最感悦候、然者無親疎通進誓詞、存知其旨、弥々忠功肝要、急度及行天下静謐之馳走、不可有油断事專一候、猶一色駿河守可申候也、

五月十三日（花押）

#### 法性印

信玄が將軍家に対する忠節を、起請文を以て（牛玉宝印を翻し）を誓い、これに対し義昭が「まことに無二の覚悟」と応じている。従来、元龜三年とされてきた文書だが、鴨川氏は信玄の動向ならびに義昭・信長関係の破綻に対応するものとの観点から、元龜四年と比定している。柴氏もこれに同意し、義昭が「天下」（畿内）静謐を直接信玄に求めるのは、遠江・三河侵攻後しか考えられないとしている（柴二〇七）。

以上の元龜三年九月二十六日【史料四】から同四年五月十三日【史料五】に至る、信玄と足利義昭との関係の推移に照らすとき、信玄による本格的な遠江・三河侵攻は元龜三年十月に開始されたとするのが、おさまりがよく、矛盾がない。

これまで検討してきたところからすると、元龜二年段階における武田軍による本格的な遠江・三河侵攻を示す史料は、『家忠日記増補』などの後代史料のみであって、同時代史料のうちには一点も確認できない。元龜二年段階の政治状況からしても、鴨川氏が指摘しているとおり、北条・上杉と敵対している状況の中で、織田・徳川との関係を本格的な敵対関

係に転化してしまうこと必定の状況を、武田氏自ら作り出すとは現実的に考えにくい。

本章冒頭にみたとおり、永禄十二年時の徳川軍との衝突に関しては信玄の方から信長に取り成しを頼んでいる。元龜三年一月時点でも信玄は、たとえ表向きにすぎないとせよ、信長に好を通じ、「何れの宿意を以て信長へ疎遠を存すべけんや」と伝えている（戦武一七七五）。

武田信玄による本格的な遠江・三河侵攻は元龜三年十月以降とする、鴨川・柴説は揺るがないと結論する。

ところで、元龜一年の武田氏による遠江・三河侵攻があったとする柴辻氏が挙げている根拠の一つに次の史料がある。

【史料六】二月二十三日付 信玄判物写（戦武一六五七）

一、氏政向御厨相詰 無功退散候、然者不図遠州江令出馬候事、

一、去年以来申届候筋目、此節候之条、早速手合事、付両筋事、

一、向小山拔本取出事、以上、

二月廿三日 信玄（花押影）

#### 下条讃岐守

この文書は、元龜二年に比定されており、御厨（静岡県御殿場市）の深沢城（御殿場市）における武田・北条の紛争に関連して、武田氏による遠江への出馬について言及されている。同時期に深沢城において戦があったことは、北条方の記録からも確認できる（戦北一四六二）。また、元龜二年二月二十三日付武田家朱印状に深沢城を武田氏が扱っている（戦武一六五二）。さらに、氏政が信玄と対立している期間に御厨にいたと確認できるのは、元龜元年十二月以降である。以上の点から【史料六】は元龜一年であると確認できる。また、鴨川氏はこの史料について、元龜二年であることを認めている。ただし、一条目の「令出馬候」が「出馬します」という意向を伝えたものなのか、「出馬しました」という過去形の表記なのかは判別できず、元龜二年二月二十三日時点で遠江へ出兵した証拠にはなりえないとする。三条目は、小山（静岡県吉田町片岡付近）の砦を陥落させたというより、小山に向かい合う砦を築くというのが主題であり、遠江を攻めるためであったとは限らないとする。以上の二点から元龜二年における武田氏の遠江侵攻を否定している（鴨川二〇二二）。

確かに一条目の文言は、過去形とは断定できず、同年における遠江への出兵の確証とはなり得ない。しかし、三条目の文言を皆を築くと読み取るのは無理ではないか。「抜く」の一般的意味からすれば、やはり「小山へ出向き、皆を陥落せよ」と読むべきである。

徳川氏は、元龜元年十月の時点で、武田氏と断交し、上杉氏と同盟を結んでいる（上越九四二）。【史料六】の時点で、徳川・武田間の緊張は極まっており、信玄が対徳川のために遠江へ侵攻する意志を固めていたことは十分に考えられる。

先に触れた元龜三年一月の信長側近あて武田信玄書状（戦武一七七五）において、前年十二月に自身が北条との和睦を遂げた（戦武一七六二）ことにつき、「例によって『三・遠両州』より信長のもとへ『虚説』が届けられるであろうが、『倭者之讒言』に油断して信用なさらぬように」と述べている。この時点において信玄が、家康に対し甲尾同盟を割きかねない存在として警戒を強めていたのは確実である。

### 第三章 岩村遠山氏の武田氏服属

元龜三年の遠江・三河侵攻とほぼ同じ頃、甲尾同盟の媒介者であった遠山氏は、後継者問題を抱えていた。元龜三年頃岩村・苗木遠山氏の当主景任・直廉兄弟が子をなさずに没し、継嗣がきまっていなかった。この時、信長は実子である御坊丸を岩村城に入城させ、嗣子とした。苗木城においても一族の飯羽間遠山氏の遠山友勝を入城させ、苗木遠山氏を相続させた。河田重親宛上杉謙信書状（上越一一三〇）によると、元龜三年十月に織田信広と河尻秀隆により岩村城は制圧され、織田氏が遠山氏を掌握した。当時、信長は上杉氏と武田氏の同盟を締結させるために動いていたが、武田氏は朝倉氏に対し、信長との敵対を表明するなど緊張が高まっていた（戦武一九八九）。そのような状況下において、それまで織田・武田に両属であった美濃遠山一族を完全な配下に収めた織田氏の行為は、武田氏との東濃方面での軍事衝突をも覚悟したものであったと考えられる。

しかし、岩村城は同年十一月に武田氏の手に渡った（戦武

一九八七～一九九一)。「軍鑑」によれば、武田軍が岩村城を包囲し、景任室が武田軍の將秋山虎繁と婚姻を結び、御坊丸は甲府に送られたという。この岩村城をめぐる異変は、武田氏側の同時代史料の上では、十一月十九日付武田信玄書状写(戦武一九九一)に「去十四日岩村之城請取」とあるが、岩村城が自発的に武田氏配下に属すことを選び取った結果なのか、武田軍勢に包囲された結果として開城したのか、判然としない。本稿では前者を自発の開城説と呼ぶことにする。遠山氏が武田氏に内応したことによって武田氏の手に移ったとする説である。

信玄は岩村城の異変について朝倉氏に対し次のように述べている。

【史料七】十一月十九日付 武田信玄書状(戦武一九八九)

如露先書候、去月三日出甲府、同十日当国江乱入、敵領不残撃砕、号二俣地取詰候、殊三州山家・濃州岩村属味方、対信長為当敵動干戈候、此所御分別肝要候、為其以玄東斎委細説彼口上候間、不能具候、恐々謹言、

十一月十九日

信玄(花押)

謹上

朝倉左衛門督殿

柴氏は、文中の「岩村属味方」という文言に注目し、岩村城が自発的に開城した根拠としている。さらに、通説では岩村城攻めを行っていたとされる秋山虎繁は、この時点で山県昌景とともに遠江・三河侵攻に従軍していたことを明らかにし、武田氏による岩村城攻めはなかったのではないかと述べている(柴二〇七)。

鴨川氏は、これに対し「属味方」とあるのみであって、味方に至る経緯については一切書かれていないこと、秋山以外の武田家臣による侵攻の可能性を挙げ、柴氏の説を否定した(鴨川二〇二)。たしかに岩村遠山氏が武田方となった経緯については記されていないが、武田軍の攻撃を受けて服属したのではない三河の山家三方衆と列記されている点に鑑みると、いかがなものか。

小笠原春香氏は自発の開城説に立ち、次の史料を根拠に鴨川氏の説に反論した。(小笠原二〇一一、二〇一六)。

【史料八】九月六日付 織田信重判物案(信長文書三四八)

岩村逆心之刻、其方忠節段、日吉釜戸本郷、信長如朱印、知行不可有相違候、恐々謹言

天正元

九月六日

信重

延友佐渡守殿

織田信重（信忠）が延友氏に対して、岩村城が裏切ったと  
きに織田方として忠節を尽くしたことにつき、日吉などを安  
堵している。織田氏はこので「岩村逆心」といい、岩村遠山  
氏を反逆者として扱っている。

この文言を見る限り、岩村城が織田氏を裏切ったとされて  
いることは明確である。また、鴨川氏は、【史料七】は自発  
的開城の経緯を証明しないとすると、武田軍の岩村城包囲が  
秋山以外の武将によってなされたとする時点で『軍鑑』の記  
述自体が信用できないと述べているに等しく、自身のよって  
立つ場が宙に浮いてしまう。意図せざるころではあるが、  
ためにする批判に結果しているといわざるを得ない。

柴辻氏は、「同城（岩村城）が織田方の重要拠点であつた  
だけに、城将らが自発的に投降したとの説は、奇異な感じを  
受ける」と自発的開城説に反論している（柴辻二〇〇九）。  
小笠原氏は、信長による岩村城への一連の軍事介入について、  
奥三河の奥平氏のように大名の帰属先を巡って家中で争う状

況を制するためだったのではないかと述べている（小笠原二  
〇一六）。つまりは、この強引な一手は国衆岩村遠山氏の独  
立性を脅かすことになり、かえって岩村家中における織田氏  
に対する反発勢力を強めることに結果した可能性も十分に考  
えられる。

岩村遠山氏の武田氏帰属が如何様の経緯によったのかは、  
元龜三年の武田氏による遠江・三河侵攻の目的を論ずる上に  
も大きく影響する。鴨川氏は、信玄の元龜三年の軍事行動の  
本線は美濃侵攻にあり、徳川領国への侵攻と飛弾への工作は、  
本線後方に安全地帯構築のためであつたとしている。そして、  
元來、信玄にとって信長との対決は本意ではなかつたが、本  
願寺や朝倉に引つ張りだされる形で美濃攻めを決意したとす  
る（鴨川二〇〇七）。信玄のそのような、元龜三年段階での  
政治状況判断及び戦略に沿って、岩村城包囲出兵は決行され  
たとする（鴨川二〇一二）。

一方、柴氏や小笠原氏は岩村城の自発的開城説に立ち、信  
玄の軍事行動は、もともと徳川領国への侵攻が本線であつた  
が、岩村遠山氏が服属したことにより、美濃侵攻を決断する  
ことになったとする（柴二〇〇七、小笠原二〇一六）。丸島

和洋氏は、鴨川氏の本願寺や朝倉に引つ張りだされた武田氏の状況に同意しつつも、このときの信玄の戦略については柴氏の説を支持している（丸島二〇一七）。柴氏らの説は、いふなれば、戦略中途変更説である。

ここで、疑問とすべきは、岩村遠山氏の武田氏帰属が自発的開城によるならば、信玄の侵攻目的は元來徳川氏に向けられたものであつて、信長との対決は後から付加されたとする立場と、武田氏による岩村城攻めがあつたとし、そのことすなわち、信玄の侵攻目的が当初から美濃攻めが念頭にあつた証拠であるという立場の、二極化した選択肢しかないのかである。この二者択一的な論争状況を止揚したのが、本多隆成氏である（本多二〇一〇、二〇一三、二〇一三、二〇一九）。本多氏は、鴨川氏の論に対し、岩村城への武田氏侵攻説を除き、支持した。本多氏は岩村城開城に関しては、自発的開城説の立場に立ちつつ、岩村城自発的開城の事実が、すなわち、信玄が信長との対決を当初意図していなかつたことを示すものにはならないとした。

本多氏は、柴氏らの説に対し、徳川領国への侵攻が本線ならば、三方ヶ原合戦後に浜松を攻略しなかつたのはなぜか、

岩村遠山氏の服属によつて信玄が美濃侵攻を決断したというのが、兵站的にみて作戦途上でそのような突然変更が可能であつたのか、という疑問を投げかけた。次の史料は、岩村城服属直後の時点において、信玄が信長との対決を公表していたことを示している。

【史料九】十一月十二日付 武田信玄書状写（戦武一九八七）

於其表、別而当方荷担之由、祝著（着）候、当国過半任存分候畢、岩村江移人数候条、至春者、濃州江可令出馬候、其以後、向岐阜江顕敵対候、悉皆馳走、可為本望候  
委細三村兵衛尉口上候、謹言

十一月十二日 信玄 御判

遠加々守殿へ

この文書は、美濃北部の郡上を勢力基盤としていた遠藤氏に宛てて発給されたものである。元龜三年に比定されており、岩村城へ兵を入れたとあることから元龜三年十一月で間違いない。「春」は元龜四年の一月から三月を指すから、信玄は、ひと月余の準備を経たのちの自身の美濃出陣を伝えている。

本多氏は、鴨川氏・丸島氏のいう「信玄が本願寺や朝倉の要請に応えようとした」という、信玄の信長との決戦決意に至



る動機を否定せず、本願寺や朝倉氏が求めていたのは、あくまで信長との対決であり、徳川氏を相手に戦うことではなかったとした。以上のことから、本多氏は岩村城服属によって美濃侵攻へと戦略が変化していったという見解には同意できないとし、翌年の信長との決戦に備えた地ならしとしての対織田・対徳川両方面の境目相論を解決するための出陣と捉えている（本多二〇一九）。本多氏の説は、いうなれば、元龜四年対信長決戦既定路線・二段階戦略となる。

小笠原氏が指摘するように、織田方において「岩村逆心」と認識されていること（【史料八】）よりすれば、岩村城自発的開城説は揺らぎようがない。さらにいえば、【史料九】において、すでに岩村城に兵を入れておきながら、信玄は「春以降になつてから岐阜（信長）に対して敵対を明らかにする」と述べている。信長実子が入城している岩村城を攻め落としただのならば、その時点で信長に敵対を顕したことになるのである、この時点で信玄がかかるもの言いをしている事実も、岩村城自発的開城説の傍証となる。

また、本多氏の元龜四年対信長決戦既定路線・二段階戦略説も、畿内の政治状況や三方ヶ原の戦い後に信玄がたどつた

実際の動線に照らして矛盾がなく、納得させられる。

ただし、岩村遠山氏の服属のタイミングに関する限り、信玄の戦略とは異なっていたのではないか。以下にこの点について考察する。

岩村城制圧は、もともとの武田氏の計画としては、遠江・三河侵攻から帰還後の元龜四年に着手予定であったのではなからうか。ところが、岩村遠山氏が思いもよらず自発的に開城するという大きな決断をしたことによって、武田氏の戦線が西方へ飛躍的に前進することになったのである。武田軍の志気は昂揚したであろうし、みすみすこれを放っておく手はなく、むしろこれを見捨ておけば、かえって今回の遠征で武田配下とした奥三河国衆の武田氏への信頼を著しく失ってしまいかねない。このような判断から武田氏は、計画を前倒して兵を岩村城に移したのではないか。

ただし、岩村城開城後に岩村城に兵を詰めるにとどまり、東濃地域での武田氏の軍事攻勢は確認できない。この事実は、先に推理した美濃侵攻前倒し説と照応している。

美濃遠山一族の主要な分家として苗木遠山氏と明智遠山氏がある。苗木遠山氏は元龜四年に当主が死亡した。本章冒頭

で述べたとおり、この時、信長の命を受けて美濃遠山一族の分家の一つである飯羽間遠山氏より遠山友勝が入って苗木遠山氏を継いだ（横山二〇一七）。「遠山氏系譜」に、遠山友勝は信長の命を受けて入城したとある。このとき岩村城と同様に信長の支配下となったが、岩村城が武田方についたのと同じく武田方となったと伝える記録はない。横山氏によれば、苗木遠山氏が武田氏に属したのは天正三年から天正十一（一五八三）年までであって、友勝の後に苗木城主となった友忠の子友政が武田方であつたという（横山二〇一七）。

明智遠山氏は、元龜三年冬に当主であつた遠山景行が、秋山虎繁率いる武田別動隊と合戦に及び、討死したと伝える（鴨川二〇〇七）。ただし先述したように、秋山は元龜三年には遠江・三河侵攻に従軍しており、当地へ遠征したのは元龜四年以降と考えられる（柴二〇〇七）。したがって遠山景行が秋山との合戦で戦死したのが史実であるとしてもそれは元龜四年であつて、その時点まで織田方であつたということになる。なお、明智城は、天正二年の武田勝頼の東濃出兵において武田氏から攻撃されている（『信長公記』）。岩村城のよ

以上のように、美濃遠一族の元龜三年段階での動向は一樣ではなく、同年の段階で武田氏に服属したのが明確なのは岩村遠山氏だけである。その動きは、周辺の遠山一族の中でいささか突出したものに見える。

奥三河の国衆服属と平定を求めて、元龜三年に遠江・三河に侵攻した武田氏にとって岩村城の自発的開城は青天の霹靂であつたのではないだろうか。信玄は奥三河平定後、美濃に進軍する予定ではあつたものの、美濃遠山一族全体ではなく岩村遠山氏のみ突然の服属はいささかの困惑を伴うものであつただろう。岩村遠山氏服属時は、軍を三河方面に差し向けており、直ちに岐阜を攻め入る段階ではなかったが、ひとまず武田軍勢を岩村城に入れ置いたと推測する。本多氏の二段階戦略説に即して言うならば、二段階戦の一部前倒し説でも称することになる。しかし、その後の信玄の病状悪化と死があつて、武田氏が岩村城周辺の遠山一族を落城させるのは、天正二年の勝頼の代まで先延ばしされることとなつた。

## おわりに

東濃という地域は、一五五〇～一五七〇年代の間、織田氏や武田氏などの戦国大名勢力に挟まれた土地であった。そのような地域を支配していた美濃遠山氏は、戦国大名とだけでなく、今川氏に叛した三河広瀬の国衆三宅氏とも姻戚関係を結んでいたといい（横山二〇一七）、周辺の様々な勢力と結びことで自立性を保持していた。織田氏が勢力を伸ばし、武田氏と敵対するようになると両属となり、甲尾同盟の仲介をしていたと考えられる。織田・武田間の仲介を果たすことが自らの存在価値を高めることになっていたのであろう。しかし、元龜年間に織田・武田間の緊張が増してくると、美濃遠山氏もいずれかへの従属を迫られた。美濃遠山一族の宗家である岩村遠山氏は元龜三年に武田氏へと降り、織田氏と敵対した。この時期、永らく通説として、元龜二年に武田氏は、先立つ永禄十二年段階ではともに今川領へと侵攻した徳川氏に向け戦を起こし、その領国遠江・三河に侵攻したとされてきた。しかし、鴨川達夫氏が「元龜二年の三河攻めは全くの虚構で

ある」としたのを発端とし、多くの議論が重ねられてきた。論争をたどりながら私なりに検討した結果、元龜二年の遠江・三河侵攻を示すとされてきた文書の多くは年代比定の誤りであることが明らかであり、同年における少なくとも三河侵攻の根拠は皆無と確認した。一方、遠江侵攻に関しては、元龜二年と比定できるものがあり、遠江への限定的な出兵は存在していた可能性があると結論した。このような三河と遠江への対応の差は、元龜二年時の武田・徳川の間関係を考えると納得がいくところである。この時期に武田氏が近隣勢力のうちで同盟を結んでいたのは、織田氏のみで、三河や美濃にまで侵攻することは、織田氏との関係を悪化させ外交的孤立を深める可能性が高く、武田氏が抱える上杉・北条との軍事的緊張を考えれば、これが実行される可能性はなかった。一方で、徳川氏は織田氏と同盟しつつ、元龜元年に、武田氏と断交し、上杉氏と同盟を結んだ。そのような状況下で、甲相駿国境地帯は軍事的緊張状態にあったと思われる。

信玄による元龜三年の軍事行動の目的については、上洛説が俎上にされたこともあるが、畿内において信玄上洛への期待や上洛間近との憶測があつたのは事実としても、信玄自身

の考えを示した確かな史料は存在しない。現実として、朝倉義景の越前帰国に乗じて、三方ヶ原の戦いに先立つて信長は岐阜に帰っており、浜松城に援兵三千余を送っている（戦武一九九〇）。上洛以前にまずは信長との戦いが前提となる。遠江侵攻の標的が岐阜の信長であったのが、徳川領国であったのかについては、本多氏の翌元龜四年対信長決戦既定路線・二段階戦略説が説得的である。

しかしこの信玄の計画は、現実にはイレギュラーな事態に直面した。岩村城の自発的開城である。三方ヶ原で一方的な勝利を収め、浜松城門前まで迫りながら武田軍が三河山間地域へ移動したのが、既定の二段階戦略に沿ったもののなか、岩村遠山氏服属という事態に対応して俄かに選択された行動であったのかは、議論の余地が残るだろう。しかしいずれにせよ、信玄が信長との対戦を決意した時点で、徳川氏への対処は局地問題と化し、せいぜい信長を引っ張り出すための利用程度の、二次的位置づけとなるのは必然の成り行きとして理解できる。

戦国大名領国の境目に位置する国衆の動向は、小規模な勢力ながらも、ときに戦国大名間の軍事・外交上の決断を左右

する重要な鍵となる。本稿において、岩村遠山氏にその確かな一例を見たところである。

## 注

(1) 鴨川氏は、武田・徳川間の関係悪化を元龜元年の徳川・上杉同盟の成立にあるとしている（鴨川二〇一二）。これに対し小笠原氏は、武田・徳川間の関係は、武田氏の駿河侵攻後の永禄十二年の段階ですでに悪化していたとする（小笠原二〇一六）。

(2) 足助と岡崎を結ぶ街道筋には、「天正二年甲戌ころ」ないし同三年に山県昌景あるいは武田勝頼が足助に攻め入り、一帯の寺社を焼き払い、さらに岡崎に攻め入らんとしたと伝えらる、十六世紀成立の記録（『新修豊田市史』6 資料編 古代中世 寺社由緒書一ならびに『松平氏由緒書』、棟札、伝承が残されている（村岡幹生二〇二〇）。

(3) 【史料三】が発給される五日前に、信玄の弟である一条信竜より同内容の書状が発給されている（戦武一七〇九）。

## 引用・参考文献

### 【史料出典一覧】

『甲陽軍艦』（酒井憲二編著『甲陽軍艦大成』第一・二巻、汲古書院、一九五四年）

『信長公記』（奥野高広・岩澤愿彦校注、角川書店、一九六九年）

- 『戦国遺文 武田氏編』(戦武と略記し、文書番号を記した)  
 『戦国遺文 後北条氏編』(戦北と略記し、文書番号を記した)  
 『戦国遺文 今川氏編』(戦今と略記し、文書番号を記した)  
 『上越市史』別編1(上越と略記し、文書番号を記した)  
 『山梨県史』資料編5 中世二下(文書番号を記した)  
 『愛知県史』資料編10 中世三(文書番号を記した)  
 『静岡県史』資料編7 中世三(文書番号を記した)  
 『遠山氏系譜』名古屋遠山彦四郎系譜 苗木遠山氏系譜 明智遠山氏系譜 名古屋市鶴舞中央図書館蔵(遠山氏系譜と略記す)  
 奥野高廣『増訂織田信長文書の研究』補遺。索引(吉川弘文館、二〇〇七年。信長文書と略記し、文書番号を記した)

# 【参考文献一覧】

- 小笠原春香『武田・織田間の抗争と東美濃 元龜・天正年間を中心に』(『武田氏研究』五三、二〇一六年)  
 同『武田氏の外交と戦争』(柴辻俊六編『戦国大名武田氏の役と家臣』岩田書院、二〇一一年)  
 小川雄『一五五〇年代の東美濃・奥三河情勢 武田氏・今川氏・織田氏・斎藤氏の関係を中心として』(『武田氏研究』四七号、二〇一三年)  
 鴨川達夫『武田信玄と勝頼 文書にみる戦国大名の実像』(岩波書店、二〇〇七年)  
 同『元龜年間の武田信玄 打倒信長 までのあゆみ』(『東京大学史料編纂所研究紀要』二二、二〇一二年)

- 柴辻俊六『武田氏の上洛と織田信長』(『武田氏研究』四〇、二〇〇九年)  
 同『元龜・天正初年間の武田・織田氏関係について』(『織豊期研究』十三、二〇一一年)  
 柴裕之『戦国大名武田氏の遠江・三河侵攻再考』(『武田氏研究』三七、二〇〇七年)  
 同『長篠合戦再考 その政治的背景と展開』(『織豊期研究』十二、二〇一〇年)  
 新行紀一『戦国領主 水野信元』(刈谷市史 第二巻 本文(近世)、一九九四年)  
 武田氏研究会編『武田氏年表 信虎・信玄・勝頼』(高志書院、二〇一〇年)  
 平山優・丸島和洋編『戦国大名武田氏の権力と支配』(岩田書院、二〇〇八年)  
 本多隆成『定本徳川家康』(吉川弘文館、二〇一〇年)  
 同『徳川家康と関ヶ原の戦い』(吉川弘文館、二〇一三年)  
 同『武田氏の遠江侵攻経路 鴨川説をめぐって』(『武田氏研究』四九、二〇一三年)  
 同『徳川家康と武田氏 信玄・勝頼との十四年戦争』(吉川弘文館、二〇一九年)  
 丸島和洋『武田勝頼 試される戦国大名の「器量」』(平凡社、二〇一七年)  
 村岡幹生『今川氏の尾張進出と弘治年間前後の織田信長・織田信

勝」(『愛知県史研究』一五、二〇一〇年、大石泰史編著『シリーズ中世・関東武士の研究 第二七巻 今川

義元』戎光祥出版、二〇一九年再録)

同

「天正三年武田勝頼岡崎攻落作戦 神官家記」嶋村家根

元慶図記」の検討」(柳沢昌紀編著『日本文化研究における歴史と文学』中京大学先端共同研究機構文化科学研究所ならびに汲古書院、二〇二〇年)

矢田俊文『日本中世戦国期権力構造の研究』(塙書房、一九九八年)

横山住雄『美濃遠山氏とその一族』(岩田選書、二〇一七年)

同

『岩倉織田氏の終焉と新史料』(『郷土文化』二二〇号、二〇一四年)